

トは、ボナヴェントゥラの属するフランシスコ会の創立者であるアシジの聖フランシスコに聖痕を授けて、彼を御目身の似姿にしたのであった。この境地において、魂は神秘的な愛の闇に包まれ、至福の法悦のうちに神と一致するのである。

長倉氏の翻訳は、正確なばかりでなく、平明であり、わかりやすい。「である」調と「です・ます」調を適宜に混ぜた文体も、微妙な情感を伝える意味で成功しているといえよう。また念に念を入れた註釈は、本書の高度な学問的価値を保証すると同時に、学界への貴重な貢献を含むものといえよう。この註釈を作製するに当り、訳者は実に十種の各国語訳を参照されたのである。訳者の労をねぎらうと共に、本書の刊行を心から歎ぶものである。

---

### 八木雄二著『スコトゥスの存在理解』

創文社，1992年，vi+162+54頁。

渋谷克美

スコトゥスは、トマスに代表される従来の「存在の類比 *analogia entis*」説を覆し、神と被造物における「存在概念の一義性 *univocatio entis*」説を主張した。本書は、このスコトゥスの説についての、日本で初めての本格的な研究であり、慶応義塾大学に提出された博士論文を基にしている。スコトゥスは自説を次のように証明している。

「およそ或る一つ概念に関して確実であると確信し、他の様々な概念に関しては疑いをもっている知性は、疑わしい概念とは別に、確実な概念をもっている。そしてまた、主語は述語を含む。然るに、この世の人間の知性は、神が有限な存在であるか無限な存在であるか、被造的な存在であるか非被造的な存在であるかということに関しては疑いももちながら、それが存在であるということに関しては確実であると確信することができる。それゆえ、神に述語づけられる存在の概念は、有限か無限か、被造的か非被造的かといった概念のいずれとも別の概念であり、それ自体としてはそれらのいずれでもなく、然しそれらのいずれのうちにも含まれている。したがって、存在の概念は一義的である」(*Ord. I, dist. 3, p. 1, q. 1-2, n.27; Vat.,*

III, p.18).

この第一証明以外に、スコトッスは主要なものとして四つ、更に比較と区別による証明を各々一つしている。然し、このスコトッスの「存在の一義性」の説はきわめて著名なものであるにもかかわらず、その研究はほとんど進んでいない。その理由を指摘して八木氏は、「人々はほとんど無自覚に、当然のようにスコトッスの説をトマスの概念によって説明しようとする。然し、スコトッスを読むためにはスコトッス自身の概念を修得しなければならない。このことが今まで、なおざりにされ、そのために多くの無意味な議論が重ねられ、ひいてはスコトッス研究を疲弊させた」(はじめに、緒論)と述べている。それゆえ、八木氏の目的は、スコトッスの「存在の一義性」の説をスコトッス自身の概念に基づいて、彼自身の哲学体系のうちで明らかにすることであり、このことが本書の特徴となっている。

八木氏は、「存在の一義性」の説を成立させる根拠となっているものとして、次のスコトッスの主張を挙げている。(一)我々人間の知性の第一の対象は「存在」であり、「神が存在である」ことを我々は自然的に認識できる。このことが、先に引用されたスコトッスの証明において前提されている。トマスは人間知性が神を見ることができるようになるためには知性が恩寵の光によって上昇させられる必要があると言う。スコトッスはこのトマスの考えに反対して、人間知性はそれ自体で「神が存在である」と認識できると主張する。我々が神に述語づける「存在」の概念も、自然的な働き、すなわち被造物から感覚を通して受け取られた概念であり、それゆえ、この概念は神と被造物に対して一義的である。(第一章第七節、第二章第二節～第五節、第三章第二節 pp.131-132、第三節、第四章)

(二) スコトッスによれば、「存在の一義性」の証明の中で言われている、神と被造物に共通に一義的に述語づけられる存在概念は、認識される事物の「内的固有の様態」*modus intrinsecus*や「実存」*existentia actualis* を含まない純粋な抽象概念である。すなわち、実在においては、神は無限であり被造物は有限である。それゆえ、神と被造物の内的固有の様態・在り方は異なっている。然しそれにもかかわらず、スコトッスによれば、このような内的固有の様態の差異——有限か無限か——は、「存在」の概念の中に含まれない。我々は、神にも被造物にも共通な一義的存在概念を持つことができるのである。なぜなら、我々人間の知性は不完全であり、それゆえ、神と被造物の実在における差異を直観 *intellectio intuitiva* によって把握することができず、神

と被造物の差異を捨象し抽象することによって「存在」の概念を持つからである。直観を持つ完全な知性は、実在のもつ内的固有の様態をも認識する。それゆえ、このような知性は、二つの存在があればその差異を明確に把握して、それらをそれぞれ異なる存在として把握するであろう。従って、直観的知性は異なる複数の対象に「共通な概念」を持つことはないであろう。然し、スコトゥスは、少なくとも此の世において人間知性が直観を持つことを否定している。スコトゥスによれば、直観を持たない我々人間の知性は、それぞれの対象の固有の様態を抽象作用によって捨象して、実在において異なる複数の対象に共通な一義的存在の概念を得るのである。

更に、認識される事物の「実在」*existentia actualis* も、スコトゥスにおいては、「存在」概念のうちに含まれない。この点において、トマスとスコトゥスは明確に区別される。八木氏によれば、トマスの「存在概念」は、その概念がそこから受け取られる事物の実存 *existentia actualis* から分離・抽象されないままに取り扱われている。他方、スコトゥスは、概念を可能なかぎり抽象して、概念をできるだけ純粋なものとし、それによって哲学を組み立てようとする。すなわち、スコトゥスは、「何性的存在（何々で在る）」*ens quiditative* と「実存」*existentia actualis* を区別し、「実存」を、「何で在るか」に即してあるところの範疇の秩序とは別であるとする (*Ord. II, dist. 3, p. 1, q. 3, n. 65, Vat., VII, p. 420-421; Lect. I, dist. 1, p. 1, q. 2, n. 66, Vat., XVI, p. 83; Ibid. dist. 23, q. u., n. 24, Vat., XVII, p. 310*)。それゆえ、スコトゥスにおいては、抽象作用によって、「存在概念」から「実存」が分離されており、スコトゥスの言う「存在概念」には、「実存」が含まれていない。このように、抽象を徹底し、概念をできるだけ純粋なものにしようとする試みは、トマスに見出されない、スコトゥス哲学のきわめて重要な特徴であると、八木氏は指摘している。(第一章第二、五、七節、第二章第一節、第四章 pp.151-152)

(三) 以上(一)と(二)によって、我々が持つ「存在概念」が神と被造物、すなわち諸々の実在において一義的であることは明らかである。更にスコトゥスは先に引用された第一証明において、「存在概念」が他の諸概念に対して一義的であることを証明している。第一証明のポイントは、「存在」という確実な概念が、「有限な存在や無限な存在、被造物的存在や非被造物的存在」といった疑わしい概念とは別な独立した一義的な概念として知性の中に受け取られているということである。八木氏によれば、スコトゥスの哲学体系において、この〈概念の一義性・独立性〉の証明に重要な役割を演ず

るのが「クウィッドとクアーレ」、「規定的と被規定的」、「外属的と被外属的」といった、概念相互の関係を示す論理的第二概念 *intentio secunda* を用いての述定分析である。すなわち、存在概念がA概念にクウィッド *in quid* に述語づけられて「Aは存在である」と言われ、B概念に被外属的 *denominabile* に述語づけられて「Bは存在である」と言われる場合、存在概念が述語づけられる述定様式は相違しているが、然しスコトッスの考えでは、「存在概念」それ自体の意味は、このような概念間の関係とは独立に一義性を保っている。例えば、人間と馬は或る意味で（動物において）一致し、或る意味で（理性的か否かにおいて）異なる。これら一致を表す概念「動物」と、差異を表す概念「理性的、非理性的」に対して、「存在」概念は異なった仕方で述語づけられる。つまり、「動物はクウィッド（本質的）に存在である」と言われ、「理性的・非理性的は外属的に存在である」と言われる。あるいは又、「存在」概念は神にも被造物にも述語されるが、一方ではクウィッド（本質的）に述語づけられ、両者間の差異についてはく被規定的に述語づけられる。この場合、トマスの立場からすれば、或るものどもに「存在」が異なる仕方で述語されることは、「存在」概念が一義的でなく、類比的であることを示していることになるであろう。なぜなら、それらは、違った意味で「存在」と言われるのだからである。これに対してスコトッスは、くこのような相違は概念の意味内容の相違ではなく、概念と概念の間の「関係」の相違である」と主張する。すなわち、「存在」概念は異なるものに、或る時にはクウィッドに、或る時にはクアーレに、或る時には規定的に、或る時には被規定的に、また或る時には外属的に、或る時には被外属的に述語づけられるとしても、異なっているのは「存在」概念の意味内容ではなく、「存在」概念と他の概念との関係である。このようにく述定様式の相違をく概念相互の関係の相違として把握することによって、スコトッスは、「存在の一義性」つまり「存在」の概念の意味の同一性を主張する。

それゆえ第一証明の結論「存在の概念は、それ自体としては、それら（有限、無限、被造的、非被造的）のいずれでもなく、然しそれらのいずれのうちにも含まれている。したがって、存在の概念は一義的である」も、く存在概念は他の概念に異なった仕方で述語づけられるが、然し存在概念それ自体は同一である」とするスコトッスの主張に基づいて解することによって明確になる。すなわち、主語概念と述語概念は、含むものと含まれるものの関係にあり（第二の大前提「主語は述語を含む」）、「存在」概念は、「有限な物は存在である」、「無限な物は存在である」……というように、他の概念

(有限, 無限, 被造的, 非被造的) に多種多様な異なった仕方です語づけられる。然し, このことは存在概念の類比性を示すものではなく, 存在概念は他の概念とは別な独立した概念として, その一義性を保持する。(第一章第三節, 第二章第六節, 第三章第二~三節, 第四章 pp.152-153)

以上が本書の議論の要約であるが, 八木氏はこれらの論点を, テキストの綿密な検討に基づいて論じている。①スコトゥスの「存在の一義性」の説が, どのような根拠によって成立しているのか, ②トマスと異なる, スコトゥスの独自性という点に関して, 評者は本書から多くのことを学ぶことができた。ただ, 八木氏自身が述べている (p.156) ごとく, 本書ではスコトゥスの「存在の一義性」説が専らトマスの「存在の類比」説との対比で論じられているが, 然しスコトゥスの直接の論敵はトマスではなく, ガンのヘンリクス (Henricus Gand) である。今後, ヘンリクスの類比説がどのようなものであり, ヘンリクスとスコトゥスの論争点は何であるかを明確にしたうえで, 更に研究を進めていくことが必要であろう。八木氏のこれからの御研究の発展に期待する。

---

### 中山善樹著『エックハルト研究序説』

創文社, 1994年, 196頁。

谷 隆 一 郎

本書はエックハルトの哲学・神学の中心的位相を解明しようとしたものであって, とくにエックハルトの学問的な営みの中心たるラテン語著作に本格的に取り組んだものとしては, 我が国で最初の研究書であろう。全体として著者は, エックハルトの文脈の忠実かつ正確な祖述と再現を旨としているが, その論述の背後にわれわれは, エックハルトの生・言葉への全人格的な共感と愛惜とが存していることを察知しうるのである。そこにはまた, エックハルトを真実愛し, その著作に通暁した者にしてはじめて語りうるけれんなき信頼と憧憬とが滲み出ている。

言うまでもなくエックハルトは, かつてドミニコ会の栄えある「学匠」であり, ア